

オーボエとの出会いは、雪乃さんが十一歳のとき。生まれ育った沖縄から、家族でロンドンに引っ越したばかりのころだった。沖縄ではピアノや三線、沖縄舞踊に触れ、リコーダーも好きだったが、オーボエは見たこともなかった。音楽家の父の勧めで習いはじめたが、やがてドイツの創立五〇〇年を誇る名門オーケストラのオーボエ奏者として花開くとは、夢にも思っていなかった。音楽の「芽」はどのように育ったのだろう。

楽しさを深める土壌づくり

最初のころは、父がたくさん楽譜を買ってきて、次々いっしょに合奏しながらサポートしてくれた。やがて土曜日に通いはじめた音楽教室では同世代の友人もできたが、ロンドンで日本人学校に通っていた雪乃さんは、中学部の卒業時には日本での進学を考え、東京音楽大学の付属高校を受験した。そのときに国際的に活躍する日本人の演奏家から、オーボエを楽しそうに吹く姿に音楽への愛を感じると褒められる。しかしまだ本人は音楽家になるという野心はなく、音楽の「苗」はしっかりと根づいていなかった。

単身で日本に帰国し、初めて親もとを離れた寮生活には、別の「楽しさ」が待っていた。「おいしいスイーツやおしゃれな店やカラオケ……東京は誘惑がいっぱい（笑）」

練習に身が入らないうえ、多忙な先生はレッスンの時間がなかなか取れない。やがてほかの学生がコンクールで入賞し、大きなプロジェクトを任せられるのと自分を比較し、自信



日・英・独で 音楽の「芽」を 育てる



ゆきの 雪乃・トンプソンさん

バイエルン国立歌劇場管弦楽団
副首席オーボエ奏者

沖縄生まれ。小学5年生のときに家族で渡英し、中学3年生まで日本人学校に通う。その後単身日本に帰国し、付属高校を経て東京音楽大学へ。卒業後に再度渡英し、英国王室音楽院の修士課程を首席卒業後、ドイツ学術交流会 (DAAD) の奨学生としてドイツのハノーファー音楽演劇メディア大学のソリストコース修了。ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団アカデミー (研修生) を経て、現職。現在はドイツ人の夫とふたりの子どもたちと共にミュンヘン在住。

がなくなっていく。また門下生の間に「先生が絶対」という雰囲気があり、型にはめられるような疑問も湧く。大学三年のころには音楽の「楽しさ」が失われて「もう続けられない」と悩み、「苗」が枯れかけてしまう。

そのとき、環境を変えたらという父の提案もあり、翌年ロンドンの王立音楽院へ。

「そこでは先生に、いつも『More!』もっと自分を出して!』と言われました。日本では弾き方の指導も細かく楽譜に書いてくれたけれど、欧州では、まず『あなたならどう演奏する?』と問われ、自分で考えなくてはならない。それが私には合っていて、世界が広がり、すごく自由になりました」

ヴィジョンが情熱を育む

土壌を得て元氣を取り戻し、若木」となったが、本気でプロを目指したのはドイツに留学してからだと言う。さらなる成長に必要な「肥料」はヴィジョンだった。

「日本でもイギリスでも、プロの音楽家の仕事は少なく収入も不安定です。でもドイツは音楽の客層が厚く、各都市にオーケストラがあり、「雇用体制や給与も安定しています」

若手の音楽家が欧州各地から集まる管弦楽団に参加して才能豊かな仲間といっしょに音楽をつくり上げる喜びを味わい、「プロのオーケストラに入団したい」と思いは固まった。しかしもちろん競争は厳しい。一つの空席に、世界中から何百人も応募し、オーディションは何段階もある。でも途中でつまずいてもあきらめなかった。



ドイツ人の夫はヴィオラ奏者。お互いに演奏会や日中の練習時間を確保するため、子育ては協力し合っている。



“トンプソン”は、音楽家であるイギリス人の父の姓だが、家族は日本語で話していた。現在両親は沖縄に戻り、父は日本に帰化して、姓を母の“上地”と改め、沖縄伝統音楽の伝承者として活躍中。

「練習への意識が変わって、基礎から学び直し、朝から晩までオーボエに向かい合う日々でした。厳しい道ですが、解釈や表現力と同時に音楽への愛情が深まりました」

もう音楽は表面的な楽しさではなく、根幹を強くする情熱になっていた。その思いは、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団アカデミー（研修生）を経て、バイエルン国立歌劇場管弦楽団に入団し、しっかりと根づく。

才能は褒めて伸ばす

入団して十年を経た現在、副首席オーボエ奏者として、枝を豊かに広げる。音楽を教える立場にもなって、大切にしているのは、長所を伸ばすこと。

「音楽を続けるのはスポーツと同じように体力もいるし努力が必要です。短所を叱るのではなく、長所を見つけて自信をつけたい。反復練習もゲーム感覚で楽しく。技術が向上すると、音楽をより深く理解できます」

プライベートではドイツ人の夫と共に、十二月に誕生した長女と六歳の長男を育てる日々だ。子育ての基本も「褒めて伸ばす」。

「これは夫から学ぶところが大きいですが、日本のように謙遜せず、『すごい!』と褒めて、さらに挑戦を促します」

国際的に活躍するなか、二〇一九年には日本で初めてマスタークラスを開催した。

「日本、英国、ドイツで学んだ経験を生かして生徒の世界を広げ、力になりたいです」
新たな種がまかれ、育っていく。

(取材・文 松島あおい)